



私が好きなものを熱く語ることで

何かのきっかけになればいい。

そう、本気で思っているんです。

# 市川紗椰

モデル・タレント

鉄道や相撲、アニメにアート、音楽、建築、ハンバーグまで！

さまざまな分野のカルチャーを情熱的に追求し、

その造詣の深さでも、各方面から注目される市川紗椰さん。

ディープなマニア気質と内省が、絶妙なバランスで同居する、

魅力的なキャラクターから目が離せなくなりそうです。

## Profile



## 市川紗椰 (いちかわ さや)

1987年生まれ。アメリカ人の父と日本人の母を持ち、4歳から14歳までアメリカで育つ。16歳のときスカウトされ、雑誌『ViVi』の専属モデルとしてデビュー。モデルとして活躍するほか、ラジオやテレビなどにも多数出演。現在、J-WAVE「THE NICHE WORKBOOK ～ニッチな学習帳～」、NHK-FM「× (かける) クラシック」のパーソナリティを務め、『週刊プレイボーイ』では長年、自身のマニアライフをつづる人気コラムを連載中。著書に『鉄道について話した。』(集英社)がある。

## こども時代を過ごしたアメリカに 今の私のルーツがあります

アメリカ・ミシガン州のデトロイトで育ちました。今思えば、うちの近所には変わった建築がとて多かったです。一軒家ばかりなんですけど、見るからに不思議な形だったり、おかしいところに窓があったり、間取りがおもしろかったり。私が小学5年生くらいまで住んでいたお家も、吹き抜ける、すごく変わったデザインでしたね。両親も建築が好きなので、たぶんその個性も気に入って、そこを選んだんだと思います。

生活圏だったデトロイトとその近くのアナーバーは、音楽やアートが盛んな芸術文化の街です。まだ小中学生だったし、とくに意識していたわけではないんですけど、今の私の音楽好き、アート好きは、そこからきているのかもしれない。ライブハウスやコンサートホール、美術館にも、頻繁に行っていましたから。あと、アナーバーにはミシガン大学があることもあって、世界中から人が集まるとても多様性のある場所で、そういったところにはすごい影響を受けたなと思っています。

母の実家のある岐阜に行ったり、東京を観光したりと、日本にはちょくちょく来ていたし、日本に対してすごく楽しいイメージを持っていて。日本の文化も好きだったので、14歳で東京に引っ越すことになったときは普通に楽しみでした。インターナショナルスクールに入ったので、カルチャーショックという感じもなかったです。

ただ、住環境はかなり変わりましたね。やっぱりアメリカは広いので、比べるとシンプルにお家は狭くなったし、家と家の距離も近い。でも、こどもだけで歩いてどこにでも行けちゃう距離感というのが新鮮で、それがとても楽しかったな。アメリカだとどこに行くにも車で送迎してもらえないから、こどもだけで出掛けるのは物理的に難しいんですよ。大好きな電車を日々の移動に使うようになったのも日本に来てからです。

高校を卒業して、初めて1人暮らしをしたのは神保町でした。好きな本屋さんが何軒かあるのでよく行って、住んでみたい街だなと思っていたんです。それが初

マンション暮らし。初日に練乳を1本買って冷蔵庫に入れて、満足したのを覚えています。なぜか「冷蔵庫には練乳がある」というのが理想の大人像だったみたいで。結局ほとんど食べなかったんですけどね(笑)。

## 増え続ける趣味の本や雑貨たち 収納のプロに教えを受けて正解でした

何度も引っ越しをしてきたなかで、一番印象に残っているのは、けっこう長く住んだ代官山のお家。その段階で、住まいに求める条件というか、自分の好み理解できたように思います。廊下があって、日当たりがそこそこよくて、リビングの形はこうで、とか。そういうのがわかってきて、がぜん暮らしが楽しくなりました。壁の色を変えたり、集めているフィギュアを飾ったり、“自分の家”っていう感じにできた。車も買ってみたいして、なんか、ちゃんと大人になったような気分を初めて味わったのが、そこに住んでいるときですね。

そう、廊下が好きなんです。日本だとマンションでも一軒家でも、廊下がない家って多いじゃないですか。部屋から部屋にそのままつながっていたり、玄関を入るとすぐ階段だったり。でも、アメリカで育ったからというのもあるんでしょうけど「家には廊下がある」というイメージが強くて、そこにはちょっとこだわってしまう。廊下に絵などを飾るのも好きですし、廊下というたぶんムダな空間を、私はゆとりとしてとらえています。

今住んでいるマンションも、もちろん廊下のある間取り。分譲なので、部屋によって床を最初からカーペットにしたのもポイントです。私の育った90年代のアメリカはオールカーペットの家が多くて、それが落ち着くっていうのがDNAに組み込まれてる。確かに汚れちゃうし、夏は湿気で暑苦しいけど、大好きなんです。

これまでは、物が増えて手に負えなくなって、逃げるように引っ越すことが多かったですね。整理もしたいし片付けもしたい、もうわかんない!もうここはムリだ!って(笑)。だから、今のお家は収納に力を入れました。私、見えないと存在を忘れちゃうタイプなので、全部しっかりした収納にすると、結局外に置いてしまっ



て現実的じゃないんですよ。だから自分なりに考えて、見える収納と見えない収納をほどよいバランスにしています。さらに、初めて収納のプロに来ていただいて、うまく収納を使う方法を教わったことで、すごく快適になりました！ 引っ越して1年くらい経った頃、せっかくなが入ったお家をごちゃごちゃになりはじめて心がどんよりしてきたので、これはもうプロに頼るしかないなって。人生でやってよかったことのトップ3のひとつです。本当にプロはすごい。みんなにおすすめしています。

### 趣味を仕事にする難しさも感じつつ これから、魅力を伝えていけたらと

こどもの頃から、もののルーツが気になるタイプでした。何かを好きになると、その起源や、どういうものの影響を受けているのかといったことを、どんどん遡って調べたくなる。あとは、中学生くらいのとき、周りにも音楽好きの子が出てきて、自分は見知りだけど、好きな音楽の話だったらできると気づいたんですよ。その会話を次に会うときにつなげるために、もっと詳しくならなきゃと思って、それで、より深く調べるようになったのかもしれないですね。

やっぱり息抜きとして楽しんでいたものが仕事になると、嫌なことがあったときに逃げ場なくなるので、趣味を仕事にするのは、よく考えたほうがいいと思いま

す。何が困るって、例えば番組で好きなものについて話しているとき、名称とか年号とか、何か1個間違った情報を言ったとしますよね。あとですぐしょんぼりするんです。で、次にその好きなものを見ると、「ああ、あるとき私、間違えた。迷惑かけた」って、失敗を反芻してつらくなる。あとは鉄道の企画なんかでも、「もっとうまく説明できたのに」っていうのをプライベートで思い出しちゃって、歯がみすることもああるんです。そういう意味で、上手にすみ分けしたいっていう感じですかね。

その場所に行かないと出合えない食べ物とか建物とか、そんなローカルなものが好きなので、そういうのもっともっと、これから探して見つけたい。ローカル線の旅の楽しみも、ひとつはそれだと思うんですよ。私が見つけて心躍らせたものを紹介することで、誰かがそこに行くきっかけになれば。今、オーバーツーリズムが深刻な問題になっている場所がある一方で、もっと観光に来てほしいと思っている場所もいっぱいあって。そういうところでうまくみんなが行きたくなるような、仕組みだったり情報だったり、好奇心をくすぐる何か求められてる。その力になれば、すごくいいなって思います。

インタビュー動画は住宅金融支援機構（JHF）  
YouTube公式チャンネルでご覧いただけます  
[https://www.youtube.com/playlist?list=PLcbOj07XtnfKA4\\_r\\_69-mElwHrGjyKXI](https://www.youtube.com/playlist?list=PLcbOj07XtnfKA4_r_69-mElwHrGjyKXI)

